黄金の服

佐藤泰志

金の服

佐藤泰志

河出書房新社

佐藤泰志（さとうやすし）
昭和二十四年、北海道生まれ。国学院大学卒。
著書に『きみの鳥はうたえる』『そこのみにて光輝く』（共に河出書房新社刊）がある。

黄金の服

一九八九年九月二二日　初版印刷
一九八九年九月二八日　初版発行

著　者　佐藤泰志
装　丁　高専寺赫
発行者　清水　勝
発行所　株式会社　河出書房新社
東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二
電話　四〇四―一二〇一（営業）
　　四〇四―八六一一（編集）
振替口座（東京）〇―一〇八〇二

印　刷　暁印刷株式会社
製　本　小泉製本株式会社

©1989 Printed in Japan
定価はカバー・帯に表示してあります
落丁・乱丁本はお取替えいたします
ISBN4-309-00582-9

¥1.900

目次

オーバー・フェンス　5
撃つ夏　81
黄金の服　121
あとがき　234

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

黄金の服

オーバー・フェンス

土曜日の課外時間には、体育館の裏の空地の清掃や、グラウンドの草むしりをさせられた。それも重要な授業の一環と教官たちは考えているらしかったし、実際、口にもした。

彼らにもくつろぐ時間が必要なのだろう。代島が、たった今、グラウンドの草むしりの最中に、少年院にまぎれこんだような気がすると、珍しく愚痴めいたことを口にしたので、そう感想を述べた。彼の言葉に必ずしも反対ではない。むしろ賛成したい気持ち。ただ、愚痴はいいたくなかっただけだ。

代島と僕が屈んで、埃にまみれた根の浅い雑草をむしっていると、後ろで一輪車のネコ車を支えて立っていた健一が、どう思います白岩さん、羊ですよ、羊、一年たったら羊になりますね、と大声で同意を求めてきた。

「女も知らない子供たちに混って、きをつけ、番号、礼、解散、ですからね」

「健一は世間も女も知っているのか」彼より二歳齢上の代島は悪意のない皮肉をいった。

「ひどいな。こう見えても僕は二十二で、二年間、車のセールスをやっていたんですからね」
「知らねえでやがんの。虚勢を張るなって」と代島はとりあわなかった。
「知っていますよ。女ぐらい」
「むきになるなよ。それこそ女ぐらいで」
僕はいって立ちあがると、むしった草を健一のネコ車に捨てた。前の分の草は水分を失ってすでにしなびていた。休もう、と僕は同じ齢の代島に声をかけ、陽当りのいい土手へ行って、草の中に寝転んだ。代島もやって来て並んで寝転んだ。
休み休みやっても、たいした草の量ではなかった。先週、体育館裏の狭い空地の清掃をした時には、十分間もあればすべてがすんだ。他の科の少年たちが教官の眼を盗んで吸った煙草の吸い殻や、まだトルエンの匂いのしみこんだビニール袋を拾い集め、草をむしってしまえばそれで終りだった。トルエンのことをいちいち、教官に報告に行く者はいなかった。
五月だった。それもあと二週間で終る。原さんと森が並んで草むしりをしている。原さんはにこにこ四角い顔に笑みを浮べて、もう、いっぷくか、と叫び、健一に、こっちもずいぶんたまったぞ、と呼んだ。肥満体の健一が尻を左右に振りながら、ふたりの所へネコ車を運んだ。
はるか遠くに見える、海峡に突き出ている三百三十五メートルの山に視線を向けた。山はくっきりとした輪郭を持ち、夏が近づいていることを感じさせた。光は眩しくはなかったが、海峡さえもが無数の発光体をまき散らしたようにきらめいていた。グラウンドは小高い丘を切り取って作ってあるので、ライト側にだけある緑のフェンス越しに見える町並みは、一部分しか見えない。まだ二カ月しかたっていないのだ。あの海峡を連絡船で、行商人やシーズンオフの数少ない旅

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

行者に混って、山を迂回し、桟橋のタラップを降りてから。父の家で五泊し、それから今のアパートでひとり住いをはじめた。たったの二カ月だ。

「森、ここと自衛隊とどっちがいい」と草に両足を伸し、片肘をついて、代島が叫んだ。

「ダイちゃん」

制するつもりで低い強い口調でいった。森はむしった草を原さんと一緒に、健一のネコ車に捨てている最中だった。森はこっちへ視線を向けたが顔を伏せた。彼は八カ月しか自衛隊が勤まらずに、ここへ来た。経験から僕は森のような男を刺激しないほうがいいのを知っていた。二十だったが、まともに相手にすべきではないということは、僕ら建築科で、僕以上の年齢の者なら気づいていることだ。

「それは、こっちのほうがいいから、来ているんだ。なあ、森」と原さんが大声をだす。おまえだってそうだろ、と代島にむかってつけ足す。

代島と健一と僕は、半月遅れて職業訓練校に入校した。教官たちは建築科の三羽ガラスと呼んだ。入校手続きはすべて三月終了で、僕が引越して来たのはその月の末だったから、入校には当然間に合わなかった。最初からそんなつもりもなかった。引越した移管手続きをしに、この町の職安に出向いた時、たまたま、職業訓練校の建築科にあきがあるのを知って、成行きで入ったまでだ。代島も健一も同じケースだった。

僕はその頃何も考えてはいなかった。考えるだけの余裕も力もなかった。とりあえず失業保険を貰おうと思っていた。

はじめてこの町の川っぷちにある職安へ行くと、係の男が、実は職業訓練校の建築科に欠員が

ある、行かないか、とすすめた。大工になる気はない、と僕は答えた。男は鷹揚に笑った。なる気などなくてもいい、入校すれば、失業保険は一年間、継続的に支払われる、そのほか、日におよそ五百五十円の受講手当が出る。いい話ではないか、失業保険が、一年間に延長されて、しかも手当を貰えるし、技術も身につく。この町は全国的にみても不況だ。造船会社でさえ傾きかけている。一年、遊びに行くつもりで入校してはどうか、と男はすすめた。彼は職安にあふれている失業者をひとりでも減らしたがっていた。それに技術を覚えるなら、きみの年齢は最適だ、といった。

後で代島にたずねたら同じことをいわれたそうだ。健一は少し違っていた。彼はできれば自動車整備科が希望だった。あきがなかったのでとりあえず建築科へ入って、それから移る方法を考えようとした。まだ望みは捨てていなかったが、結局、その目論見は成功しないだろう。

入校して驚いた。健一がさっき、「女も知らない子供たちに混って」と喋ったのは本当だったからだ。印刷科も溶接科も自整科も、ほとんどが中学を卒業してそっくりそのままここに入って来た連中ばかりだった。代島でなくとも、最初に貰った諸注意を書いた紙に、外出・外泊の際には、行先、用件、帰宅時間を明らかにし、父兄の了解を得ること、などと書かれているのを読んで、ちぐはぐな気持になったものだ。

建築科だけは違った。健一にしてからがそうだ。彼は実際に、自動車整備の専門学校で二年学んだ後、どういうわけか、車のセールスマンを二月までやっていた。「社の方針で」と彼は僕にセールスの仕事をこぼし、修理工のほうが性にあっているから退職したのだ、と話した。どうせなら自整科でもう一度学びたい、と彼はいった。

代島は、アルミサッシの取付け工事店にいたし、八年前まで僕同様、東京暮しをしていた原さんは、タクシードライバーをやっていた。フェンスの際で草むしりをしている勝間田さんは停年退職になるまで、家族をこの三方海に囲まれた町に残して、石炭掘りを続けていた。実習帽からはみでている髪はほとんど白く、腰も少し曲っている。グミとオンコの木の間にいる岩田さんは、海底トンネル工事で、あのまばゆく輝いている海の底に正月まで潜って働いていた。一番若いシマでさえ、ガソリンスタンドで働きながら、暴走族に夢中になっていたそうだ。

健一がネコ車を押し、その後から、原さんと森が並んで歩いて来る。他の連中、十五名の建築科の全員は多かれ少なかれ、どこかで働いて失業し、春にここに集まった。健一は額から汗をふきだして肩をはあはあいわせ、僕らの所へ来るとネコ車を投げだし、僕の隣りに倒れ込んできた。「ケン、もっと痩せなきゃな」と三十八歳の原さんが森のそばで笑う。軍手をしている。森は無表情で土色の皮膚の中に細い眼を埋めて立っている。原さんは代島の隣りの草に腰かけ、森に坐れよと声をかける。黙って森がのそのそ土手にあがり込み、少し離れて坐る。自分の股を覗きこんでいる。

「よく、働くな、戦中派は」と原さんが、フェンス際のふたりを指さす。

軍手をしたその指の向う、陸と海との違いはあっても、ついこのあいだまで地面の底にいた勝間田さんと岩田さんを僕は見、それから、海峡と山を見る。僕は原さんがどうして、必要な時以外も軍手をしているのか、素手の時にもうまくこぶしを作って、自分の指を隠そうとしているのか知っている。左手の小指の第一関節から先がないのだ。代島や健一が知っているかどうか知らない。ダイちゃんなら知っていても喋らないだろう。

「勝さん、一服しよう」と原さんが大声で叫ぶ。

フェンスの際で勝間田さんが手を振り返す。それから隣りの岩田さんに声をかけ、ふたりで、その場に坐り込んで煙草を吸いはじめた。仲が良かった。同年代ということもあるし、地面の底で働いていたせいもあるだろう。帰りもふたり一緒だった。他の連中もそれぞれの場所で一服しはじめた。原さんが森に煙草をすすめている。森はとりわけ原さんには従順だ。それから、海底トンネル工事をしていた岩田さんにも。

いつだったか体育の時間に、教官がおもしろがって、森と原さんに相撲をとらせたが、子供相手のようにひとひねりで原さんの勝ちだった。その時、あれは誰だったろう、青山教官だったと思う。それじゃ、岩田さんとやってみろ、と命じた。岩田さんは猿が齢をとったような顔で、いくらなんでも二十歳の若い衆には、と照れたが、実際には組みあって五秒もしないうちに上手投げで森をたたきのめした。自衛隊と軍隊経験者じゃ、こうも違うものかな、と青山教官はあきれたものだ。僕が相手でも岩田さんには勝てなかったろう。森は自分より強い者を知っていた。今は、森だけがぽつんと僕らから離れていた。原さんがあれこれ話しかけていたが、はあ、ええ、と短く返辞をするだけだ。

グラウンドは埃の舞わない程度に風が吹いていた。僕はひんやりとした冷気を放っている草に寝転び、時間がそこでとまって、こうした状態がいつまでも続けばいいと、たあいもないことを考えた。

僕にあるものは、アパートでの僕ひとりの夜、それだけときめている三五〇ミリリットルの二本の缶ビール、五月半ばの湿気のない風、この町へ来て、まだ一度しか会っていない妹夫婦と、

五日間世話になった両親、グラウンドと実習室と十五人の建築科の生徒、四人の教官、海峡と山。失くしたものは、と考えようとしてやめた。今はもう意味もない。どうしてこんな不況の町に戻ったのかね、と面接で提出した履歴書を見て、建築科の課長にきかれた時、返答に窮したものだ。何の汚点もなく、おそらく原さんぐらいの齢になればあの大都会で、マイホームを手に入れることも可能な履歴だ。課長はしかしつべこべきかずに、Uターン現象というやつかな、とあの時いった。だが僕は目的を持って帰って来たのではなかった。

「皆んなもう一服か」

だし抜けに土手の上から青山教官の声がしたが、僕は顔をあげなかった。

「きれいなものですよ」と代島がいった。

「ああ、このぐらいやっておけばいいな。あとは新しい土を入れて、地ならしをして、春のソフトボール大会は建築科の優勝だな、原さん」といいながら青山教官は僕の隣りに坐る。

「そうしたら祝賀会でいっぱつ、ぱっとやりますか」

「それもいいな」赤ら顔の青山教官は太い嗄れ声で笑った。

小柄な金田教官も来て、あれ、森は煙草を吸ってもいい齢だったかな、といつものとぼけた口調で冗談をいう。

「俺、二十歳だぜ」と森は低い、威嚇するような声をだした。

「ああ、悪い、悪い、先生の勘違いだ。ところで白岩」金田教官が僕に声をかけてきた。

「今日、土曜日だな。少し残って、ノミとカンナを研がないか。先生も残る。代島と健一も。もうすぐ実習に入るから、早く追いついて欲しい」

「日曜日、家でやっちゃ駄目かな」と健一がすかさず逃げを打った。
「そうか、健一はここを卒業したら、自動車修理工になるんだったな」
「口が悪いですよ」
「本当のことだろ、ケン坊」と原さんがひやかす。
「どうだ」金田教官は僕に念を押し、僕は頷いた。代島も頷く。
「森、本当のことをいうとおまえも遅れているんだよ」
森は黙っている。心が空白になっている沈黙だ、と僕は感じる。青山教官が口を挟む。
「おまえ、何時頃寝るんだ。なんだかおかしいぞ。まさかいい齢をして、ほらトルエンだとかシンナーだとかやっているんじゃないだろうな。すぐ退校だぞ。少しは、うちのおじさんたちを見習いなさい」
森はまだ黙っている。課外時間の終りを知らせるベルがなった。僕は立ちあがった。草が僕の動きにあわせたように匂った。それは身体にもしみついているようだ。

全員帰った後の実習場は広々としていて、薄暗く、代島と健一と僕は並んで、それぞれノミやカンナを研いだ。僕はおそらく森を除いて一番遅れていた。金板を出し、金剛砂をまぶしてその上に唾液をたらしてやる。ゆっくりゆっくり姿勢を崩さずに、カンナ刃の裏押しをした。
健一は右隣りで叩きノミを研いでいた。代島も黙々とノミを研いでいる。白岩さんが残りますなどというから、こっちまで残るはめになった、と健一がぼやいた。
「帰ったっていいんだ」と代島はノミから視線を離さず、腕を動かし続けた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.